７－０２	様式３

主題	家族の経験から学ぶ看取りケア
副題	おくりびと～大切な人を看送るために～

看取りケア	情報共有	研究期間	36 か月

事業所	特別養護老人ホーム　清風園
発表者：葛窪　彩香（くずくぼ　あやか）	アドバイザー：小林　清医師（こばやしきよし）
共同研究者：佐々木　真代美（ささき　まよみ）・伴　成顕（ばん　なりあき）	

電　話	042-735-3000	E-mail	sasaki.my@san-ikukai.or.jp
ＦＡＸ	042-734-8933	ＵＲＬ	http://www.san-ikukai.or.jp/seifu-

今回発表の事業所やサービスの紹介	東京都町田市金井にある清風園は昭和３９年に開設されて今年で５０周年を迎える。都内でも２番目に古い施設である。定員は２階フロアー・３階フロアーにて 110 名。ショートステイ３名、デイサービス、グループホーム、訪問看護ステーション、診療所、ヘルパーステーション等複合施設であり、様々な地域のニーズに対応しており、地域交流が盛んな施設である。

《1．研究前の状況と課題》

全ての事業をキリスト教の精神に基づいて行うという基本精神から、清風園では介護保険制度前から看取りケアの取り組みを行ってきた。取り組み成果を、2007 年度のアクティブ福祉 in 東京で発表している。

家族に対して

・入所時に治療方針確認シート
・体調不良時に看取りについて再確認・面談
・家族懇談会での看取りケア説明

職員に対して

・定期的なターミナル勉強会
・ターミナル外部研修の参加
・偲ぶ会
・デスカンファレンス

上記の取り組みは、毎年見直し評価を重ねたことで、職員の看取りへの意識やケアも定着している。しかし、職員の看取り意識が高まるにつれ、家族の看取りへの想いを知りたいという意見が、職員や家族から出てきた。施設での看取りケアについて、家族や職員に考えてもらう機会が必要である。

	2011年度	2012年度	2013年度
看取り希望(園)	87%	90%	89%
死亡退所	21名	16名	22名
看取り	14名	10名	16名
要介護度	4.04	4.05	4.10

《2．研究の目標と期待する成果・目的》

看取りケアを行う過程で生じる家族の心の葛藤を知ることで、施設での看取りを身近に感じることができる。また将来清風園の入所を希望されている地域の人たちにも施設での看取りがどのようなものかを、選択肢の一つとして伝えていくことを目的とする。

職員は「最後まで看取れてよかった」と思えるように、家族の気持ちを知り支援の方法を模索することができる。

《3．具体的な取り組みの内容》

本研究では以下の取り組みを行った。

家族に対して

・看取りケアの職員勉強会への参加

・看取りシンポジウムの実施

「おくりびと～大切な人を看送ること～」

内容：①園での看取りを経験した家族からの体験談（家族２組）

②清風園での看取りケアの紹介

対象者：入居者家族・地域の方・職員・ボランティア

⇒終了後、アンケートの実施

職員に対して

・センター方式

・看取りケア意見交換会（特養全職員対象）

⇒職員の看取りケアに対する気持ちを語る

《4．取り組みの結果と考察》

家族や地域の看取りへの意識変化

初めての試みである「看取りシンポジウム」に参加された家族、地域の方のアンケート結果からは、看取りケアへの関心度が高い様子が伺えた。また、施設側と家族側の看取りへの想いに若干の差異も認められた。その結果から、家族や地域の方への看取りケアに関する情報提供の場を定期的に設けていくことが求められていると感じた。今後「どこで看取りたいか」を選択しなければならない家族に、施設での看取りを経験した家族が話すシンポジウムは有効である。家族間で意見交換ができ貴重な体験となった。

職員の意識変化

職員は勉強会や研修に参加することで、看取りケアの知識やケアの方法を知り、実際の現場で介護課だけでなく、他部署も一丸となって看取りケアに取り組むことが出来た。家族と共に看取りケアを実施する機会も増えたことで、意見交換会では「もっとこうしていきたい」という前向きな意見が多く聞かれた。また家族の体験談を聞くことで、職員がよかれと思って行ったケアが、家族に寂しい思いをさせている場合があることに気付かされた。その背景にはパターン化した看取りケアがあった。職員主体のケアではなく家族が主体となってケアを進めていける支援を行う必要がある。

《5．まとめ、結論》

看取りケアの主体は利用者と家族であり職員はその両者を支援しなければならない。利用者本人の希望を伺う機会がまだ少ない。利用者自身が「最期まで清風園にいたい」と家族や職員に伝えられるように、現場の職員は日々の関わりを見直していく必要がある。また、利用者の気持ちをどう家族へ伝えていくか課題である。

《6．倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

「こうして死ねたら悔いはない」

石飛幸三　著　幻冬舎ルネッサンス

《8．提案と発信》

これからの特養はターミナルケアを行う施設としての役割を果たしていかなければならない。看取りケアは特別なケアではない。普段のケア+α（気付きケア）で、その人らしい最期を迎えることができる。当たり前にいた存在がある日なくなる淋しさを、家族と分かち合える職員が多くなれば、地域と施設の関係がより深まり、看取りの場所の選択肢の一つとして施設がさらに選ばれるのではないか。

【メモ欄】